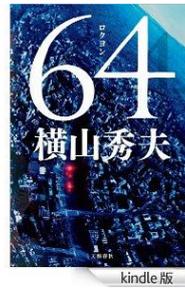


横山 秀夫
7年ぶりの新作「64 (ロクヨン)」



7年ぶりの新作——その間は、どうやって食っていたのだろうと思ってしまう。
著者は1957年生まれである。この作品を生み出すまでに、心身共に調子を崩した時期があったようだ。
苦節を越えての新出版は、達成感が大きいだろうなあ。

*記事引用；日本経済新聞より

23 読書 2012.11.4 【第三種郵便物認可】

読書

あつがきのあつ

捜査組織の複雑な構造から事件と人間を描く、警察小説の名手が7年ぶりに新作を出版した。

難産だった。書き始めたのは10年ほど前で、一部を連載した。1度は書き終えて発売日も決まったが「読者から」お金をいただける作品とはどうしても思えない」と取りやめた。そのうち心身に調子を崩し「作家の」廃業まで考えた」と打ち明ける。

主人公はある県の警察本部広報官。県警の刑事部と警務部に警視庁まで絡んだ駆け引きに巻き込まれ、新聞記者や部下からもプレッシャーを受ける「中間管理職」だ。さらに一人娘が失踪。やがて県警内で「ロクヨン」と呼ばれる誘拐事件で娘を失った被害者と主人公の運命が響き合い、終

「64(ロクヨン)」 横山 秀夫氏

盤はすさまじい迫力で事件解決へと突き進んでいく。

「組織の中で負荷のかかった人間の動きを描きたい」という基本的な欲求がある」と話す。その点で本書はこれまでの作品の延長線上にあるが、設定が複雑だ。主人公の心理の変化に説得力を持たせるため、何度も全面改稿した。一時的に記憶障害のような症状が出るほど苦闘したが、結果として中間管理職をあらゆる角度から「球体として描けた」との実感があるという。「結局、ほとんどの人が中間管理職ですよ。僕はフリーの立場だけれど、それでも

中間管理職の「負荷」描く

組織から完全に自由になるわけではない」

作家として糧になった読書体験は児童文学だという。小学校の図書室で本を読みあさり「図書館王」と呼ばれた。母の実家があった東京・神保町の書店街が遊び場だった。

本書を書きあぐねている間は「新境地を開拓しなくてはいけない」といった強迫観念も持ったが、完成すると「組織の中の人間について、もっと掘れる場所はある、書けることはある」と、逆に再認識した。すっきりとした笑顔で語った。(文芸春秋・1900円)

(よこやま・ひでお) 1957年東京生まれ。地方紙記者を経て作家に。著書に『陰の季節』(松本清張賞)、『動機』『クライマーズ・ハイ』『半落ち』など。